

小説 現姥捨て

いまうばす

馬場 駿

一 修羅 しゅら

秋口の午後七時の街はまだ明るい。勤務先の盈月(えいげつ)書房を出て幸田賢次は、プラタナスが並んでいる舗道をゆらゆらと歩き出した。紺色のシンプルなネクタイを緩め上着のポケットから煙草を出し、少し変形をしている一本を選んで唇に挟む。

再三辞退したのだが幸田は、会社から苦い仕事を任されてしまった。

「いちばん惨めな暮らしをしている老人を捜し出して密着取材しろ。経費は十分みてやる。いいか、タイトル

にも気を遣えよ、シヨッキングなのがいい。アプローチの仕方も任せる。ただ、一つだけ注意しておく、取材中に老人の味方にはなるなよ。味方のふりはいいが。徹底的にいまの世の中から落ちこぼれた奴らを叩くんだからな」

編集長の加納の前歯は二本欠けている。なにやら固形物が混じった唾が容赦なく幸田の顔に飛んできた。

幸田が同僚から聞いたところでは、繁華街で酔って強面の一団に絡み、顔面を殴打されて歯が欠け落ちたのだという。売り上げ至上主義で、推測や誇張は日常茶飯事、ニュースソースが多少怪しくても内容が面白いと踏めば、リスクを承知でトップ記事にする男だ。それでもそのお陰で雑誌の戦国時代を乗り切れて、売り上げが自分の給与や賞与になっているのだから、好きも嫌いもない。彼の部下でいるのが耐えられないのなら、さつさと会社を辞めればいいことだ。それもできないなら従うしかない。

幸田は半端な気持ちのまま、嫌味で応戦した。

「でも部長、うちのシニアジャーナルは高齢者が想定読者でしたよね、狙いは分りますが、立ち位置が違っよう

な——」

「バカ、当初の発行動機はともかく、お前最近のうちの雑誌、どの年齢層が買ってるか知ってるものを言ってるのか？ 若年層や、働き盛りの中年層なんだよ、老人じゃない。彼らはなあ、潜在的にも顕在的にも自分たちの負担になった老人層をなんとかしたいと、真剣に考えてるんだ。できれば亡きものにしたいたいな。うちの記事が彼らの欲求不満に応えているってわけだ。だから身銭を切ってうちの月刊雑誌を手にするんだ。それを老人の立場に立った記事書いてどうする」

「分りました。一つだけ確認です。記事にする際のアップローチの仕方、ホントに任せていただいていた方がいいんですね」

「くどい。さつき言ったぞ」

「はい、ありがとうございます」

表向き高齢者を貶（おとし）めるような書き方をしながら、それでいて諸制度や社会そのものの矛盾をつくこととは、どうやらできそうだ。幸田は加納に頭を下げながらそう思った。

「あ、お前、文学部卒だったな、私大の」

「あ、はい。それが何か・・・」

「この前の記事、なかなか良かった、ボツにはしたけどな。悪く思うな、うちは記事って妙なものを、その辺にうろろうろしている大衆に売る商売なんぞでな」

「売り上げってお金、ですよ、全て」

「ああ、分ってるじゃないか、それならいい」

加納が珍しく幸田に笑顔を見せた。

「失礼します」

廊下に出てすぐ、胃酸が噴き出るような気がして幸田は掌で口を押さえた。

舗道の真ん中に白いポリ袋があった。はみ出しているコンビニ弁当の蓋から見えて、落とし物ではなく、車から誰かが放り投げたに違いない。そういう目で改めて周囲を見ると、新聞の小さな切れ端、ティッシュペーパーの小袋、雨水に濡れたあと崩れた一塊の煙草の吸殻、割りばしの片割れ、かなり散らかっている。幸田は「まったく、いつからこんなにだらしなくなっただ、日本人は」と口に出しながら、ポリ袋を踏みで先を急いだ。

前から真っ赤な車が奇声を発しながら近づいてくる。

通り過ぎる瞬間に、幸田の目の前を何か横切った。舗道にはねたそれは、吸いかけの煙草だった。先端からたなびく煙の量は火が残っている証拠だ。さすがに幸田もこれは靴底で揉み消した。

「バカがあ」

立ち去る前に、潰れた煙草に罵つてもいる。

いつの間にか近くに居た若い女が幸田をなめるように見て、口元で嘲(わら)った。

「いい男台無し、バラバラのノーセンス」

大きなお世話だと思つた。

女の後姿が、「わたし危ない水商売」とカミングアウトしていた。

幸田は記事を書くにあたって、いまこのときの、二〇二五年の老人を取り巻く環境について、予備知識を得る必要を感じた。大学の五年先輩にあたる三十五歳の板垣徹に連絡を採つたのはそのためだった。

板垣は懐かしがってすぐにメールで、「午後七時半、以前遭つて一緒に呑んだ居酒屋トシ兵衛で」と指定してきた。アポなしでもいつも空いていることも選定理由らし

い。

「よう。何事だい、俺に相談て」

掘り炬燵型の卓に畳敷きの部屋で待っていると、板垣が、来るなりすぐにネクタイを外しながら言った。

「すみません、今日の今日で」

「何だ女か、ひとめぼれ結婚とか」

「何飲みますか？」

「まずは一献てか。俺吟醸酒」

「やですよ、またここで寝ちやうとか」

「俺だってやだよ、お前が女なら別だけどな」

軽口は叩いていても、二人とも笑つてはいなかった。

冷酒の入った徳利はすぐに来た。

「適当につまむもの頼んじやいました、すみません」

「込み入った話なんだろう、乾杯。すぐ本題に入れ」

「乾杯」

正直なところ幸田は、何から話していいか分らなかつた。いま高齢者の置かれた環境をと言つても、あまりにも広すぎる。

「先輩は、まちがったらごめんなさい、確か夜間高校を出てうちの法学部、卒業して区役所の福祉課に勤務、で

したよね」

もしかしたら加納からきつかけが、と幸田は考えたのだ。加納が気分を害してもそれはそれで、質問の契機はなるど。

「シニアジャーナルの記者さんが俺の経歴確認をしたということは、予想通り高齢者関係で問題のありかは何かってことか」

「すみません、当たりです。迷惑な抜擢で、僕が特別企画の担当者になってしまつて、その問題点の全容がさっぱり掴めないんです」

「いまの日本の高齢者問題の全容をつかんでる奴なんかいねえよ。学者も官僚も政府もお手上げだ。蟻ん子が巨像を見上げて何が解かるってんだ」

「いまのぼくは正に、その蟻ん子」

「分つてりゃいい。それで、幸田が書く記事つてのは、今日の俺との対談だけでつてことか？」

そうならどれだけ楽か。たとえて言えば、近眼の自分が、広くて遠い彼方の問題を見通せるわけが無い。先輩の取材は、それを可能にする眼鏡づくりと、幸田は答えた。

「例えはうまいな。そこそこ見通せたところで、実際の高齢者の取材に入ると、こういうわけか」

「はい」

「高いぞ、払えるのか金」

幸田は腹の中で舌打ちをした。もと柔道部の先輩後輩の仲だからこそ頼みたかったのだ。金を払うくらいならその道の専門家に頼むよと、声には出さず息巻いてみた。「ここのおごりだけつて顔だな」

「いえ、うちもそこそこ名のある雑誌なんで。大丈夫です」

多少引きつり気味に幸田は笑った。加納部長は経費はみると言っていたので大丈夫と踏んだ。

「そうか、じゃ、十万でいいや。ここんとこ、風俗通いが祟（たた）つてな、若干懐が寂しいんだ」

声音に卑屈さが無いのが救いか。幸田は、板垣が学生時代から女好きだったのを想い出した。

「先輩、奥さんは怒らないんですか、風俗」

慌てて口を閉じたが遅かった。首をすくめた幸田だが、意外なことに板垣は苦笑しただけだった。

「バカ、こんなわけのわからない先の読めねえ時代に、

結婚だの、親になるだの、できるわけねえだろ。性欲は風俗でフツとばして、がさつに仕事こなすしか生きる道なんてねえのさ。お前は？ いや、たしかいい女もろつたよな、冴子さんで言ったっけ。しかも卒業してすぐによ、このスケベ」

幸田には学生時代から付き合っていた太田冴子という恋人がいた。いわゆる良家の子女で、親は「不釣り合い」だと結婚に反対したが二人の熱意で説得し、卒業式の直後に届け出をすませた。冴子の腹の中にはすでに胎児がいたのだった。そのことを知った区議の父親の口利きもあり、幸田は難なく区役所に入る。そこまではよかったのだが、この就職に至る経緯が若夫婦の命取りになった。首根っこをつかんであれこれと際限なく婿を引きずり回す義父に、幸田が切れたのだ。結果は離婚、生まれた息子も、冴子が親権者となって、いわば持ち去られている。

「ほーお、絵にかいたような離婚だな。ま、お前も風俗に通えや、大袈裟じゃなくて、女性観、結婚観、人生観の全てがひっくり返るぞ。楽になれること請け合いだ」
板垣はさも嬉しそうに幸田の顔を覗いた。

「いまは凄いで。若い訳あり女で風俗は爆発しそうだけ。一九三〇年前後みたいに田舎の娘が役所のあつせんで身売りなんて話じゃないぞ。安直に金が稼げるからって、お嬢様風がゾロゾロ。まったく変な時代だぜ」

「先輩、勘弁してくださいよ」

「子どもだって同じさ。大変な想いをして育てて学（が）く）付けてやって、下手すりゃ三十近くまで経済援助して、挙句の果てが、老いて捨てられて」

「先輩、向こうの若い客がこつち見てますから、もう少し声を小さく」

「かまうもんか。親もバカでよ、受験時代に必死で息子を洗脳するのよ、勉強に専念しなさい、趣味だの、愛だの恋だの、とにかく邪魔なものは何でもさっさと捨てて！ それが人生の勝ち組につながるぞねえ。捨てられるものの中に将来の自分が入ることも知らずにだ」

幸田はいつの間にか板垣の考えが正鵠を射ているのではないかと思ひだしていた。

「ところでおい、酒はじゃんじゃん来るけど、食い物は」と、板垣が首を板場の方に向けた。

「もうすぐです、注文はしてありますから」

この話の流れが続くと肝心なことは何も聞けない。幸田は報酬を払うことを思い出し、話の主導権を奪い返しにかかった。

「ところで先輩、このごろ高齢者の破産とか自殺とか心中、あるいは息子、娘、孫などが肉親の高齢者を殺傷する事件が多発していますよね、この社会現象をどう分析したらいいですか、また、その根本原因みたいなものがあるんですか。マスコミのニュースだけじゃ、あまりにも興味本位なだけで」

「おう、本題だったな、それが。ははははは」
機嫌を損ねずにおしゃべりを終わらせることが出来て、幸田はホッと胸を撫で下ろした。

「幸田、お前、どの方向からこの高齢者問題にアプローチしたいんだ」

「どの方向？ といつても、それはどういう」

「まいったな、そこからかよ。ま、いいや、金貰うんだつたな」

幸田も少しは知識はある。しかしここでそれを口にすれば、板垣は「こいつどこまで知ってる？」という探りをいちいちしなければならなくなる。それは話の腰を折

るのと同じだと思つたのだ。小馬鹿にされているぐらいがちょうどいい。

「例えば、保険や医療という健康や肉体的な側面からか、年金や生活保護という収入面からか、安楽死や尊厳死といった生きているとは何かという根源的な問題からか、あるいは、このところお馴染みの強硬採決で改悪された社会福祉、社会保障関連法規の合憲性如何という法的な側面からか、さらにはだ、それら高齢者対策に共通するものがあるとするれば、その理論的側面は何かとか。おい、どうした」

幸田は驚いていた。ポカンと口を開けていたような気がする。教えを乞う相手を板垣にしたことを、ついさっきまで少しだけ後悔していたところなのだ。

目の前に刺身の盛り合わせと焼き鳥、揚げ出し豆腐がいつぺんに並んだ。

「遅くないですか？」と幸田が聞くと、「フツーですよ、このくらい。なんだよ」と店員は膨（ふく）れて奥へ向かった。

「え、お前怒らないのか、いまの」

「まあ、いいですよ、馴れますから」

「おいちよつと待て！ バカ野郎！」

板垣が炬燵型の卓をするりと出て、フロアに足を置いた。その瞬間だった。店員が板垣の胸倉をつかんだ。

「バカ野郎たあ何だ。バカはてめえだろう」

「お前ヤクザかあ、店員が客に向かつて言うー」

「何が客だ。安桁呑み屋で気取ってんじやねえや」

「自分の店だろう、熟（こ）なしてどうする。なんだその言い方はって言うてんだよ」と、幸田も興奮してきた。

「殴つたらーか」

店員がこぶしを握つた。

「太田！ クビだ、即刻出ていけ」

振り向くと年配の男が首を震わせて立っていた。

「けつ、ああ出ていくさ、こんなブラック会社。全部マ

スコミにばらしてやるからおぼえとけよ」

「すみません、お客様」

言葉だけでこの偉そうな男も頭は下げなかった。

「とうとう居酒屋までこんなになつちまったのかよ」

板垣は、客を客とも思わない風潮に憤慨の色を隠さなかつた。

幸田とて気持ちは同様だ。ただ、都会で暮らす若い人

の心が荒（す）んでいるとは、ずっと感じていた。安い時給、高い家賃、安定した身分もなく、それでいて人手不足から長時間勤務が続く。「自分たちは使い捨てのボロ雑巾」と言い放つた新聞の投稿も以前読んだことがある。

板垣は無然として腕を組んでいた。

「まあいいや。ところで本題だけだな、お前、今年の、二〇二五年の日本の人口を知ってるか、約一億二千万人だ。そのうち六十五歳以上が三千六百五十万人。つまり国民の三分の一が、国がいうところの高齢者なんだ。これだけでもドキドキするのに、働いて稼ぐことが出来る生産年齢人口との比率で行くとな、驚くなかれ一対二・二。働き手二人とちよつとが高齢者一人を支える構造になつていくわけだ」

「こらあたりまでは幸田も調べてはいた。十年前でも人口の三・七人に一人が六十五歳以上の高齢者。人口の七・七人に一人が七十五歳以上の高齢者だった。生産年齢人口との比率は一対二・三。それを考えれば、それほど人口構成状況が悪化したとも言えない。そんなことを考えながら、今日会社を出てきたのだった。」

「深刻さはこれだけでは伝わらねえよ」と板垣は、焼き鳥の串を横にしてハモニカを吹くように、一列全部を口へと運び込んだ。

幸田も揚げ出し豆腐に箸を向けた。腹はかなり空いていたのだ。

「もう一つ頭に入れておけや、今年の国家予算は百二十兆円。その中の何と七十兆円が広い意味での医療費なんだ。分るか、高齢者は傷病のデパート。さらに年金と膨大化する生活保護費。このままにしておいたら国は成り立ちゆかない。国はなあ、日本崩壊を危惧してどうとうルビコンを渡ったんだ。断っておくが俺は政府の弁護をするつもりはない。事実だけをお前に言いたい。それもさわりだけだ。詳しくは自分で数字を確認しろ」

板垣の目つきが変わった。

幸田も、ここは教わるうと姿勢を正した。

「まず生活保護の要件をきつくした。要保護者の所定の親族に扶養可能者がいれば生活保護は認めない。これは実はずっと以前からだ。ただ今までは形式的審査だった。簡単に言えば紙に無理ですと書けば済んだんだ。新法はこれを厳格化して、実質的審査を شدした。これを技術

的に可能にしたのが、数年前に本気を出したマイナンバー制度だ。今ではのちの法整備で、保護申請者の扶養、扶助義務者の有形無形の資産を全て職権で調査できる。これは俺の見方なだけどな、共同生活こそしていないが、実は大家族制度の復活なんだ。親族間の経済的弱者問題は当該親族の中で解決しろと言ってるわけだ、基本的に」

幸田は一つ疑問を抱いた。調査の結果国は申請を却下する。それで申請者は生活保護から見捨てられるわけだが、その理由とされた富裕親族が実際に助けてくれなかったらどうなるのか。

「その通りだ。それはまだ、法的に担保されていないんだ。戦後のプラカード事件をパクれば、汝国民飢えて死ぬ、となるかな。でもそれは国のせいじゃないわけだ」
うまい手だな、と幸田は唸(うな)った。要は国が免責できればいいのだから。

「しかもだ。これはいつたん生活保護が認められた後でも生きてくる。国はその後の職権調査の結果、保護受給者に援助可能者がいたと判断したときは、報告を待たずに保護を打ち切れることにした。どうだい幸田、息子や

行き所が無くなった患者をどうするよ。ま、これは患者の一部としても、健康保険の自己負担割合の増加は全体に対してだから節税効果抜群だな。これも強行採決で決まった。何でもかんでも病院に行く高齢者対策だそうだが、七十五歳以上の以前から後期高齢者と呼ばれていた人への負担率軽減を撤廃したのは、どつちかというと集団殺人に近いね。ずっと一割負担で来たんだからなあ。支えている家族へ負担を転嫁したことになる。これを官僚政治がやった。驚天動地とはこのことだぜ」

「三割を超えると厳しいですね。もちろん富裕層には屁でもないでしょうが」

幸田もだんだん深刻さが解かってきた。聞けば高齢者法制と呼ばれた法改正は、殆んど詳細な説明なしに強行採決を繰り返して行われた。『国の破産か、個人の破産か』の二者択一として喧伝だけはされたのだが。

「簡単に言っちゃまえば、金持ち以外は死ねってことさ。今は起源二千年代だぜ、紀元前の話じゃねえって。もつとある。自己負担比率が上がるだけじゃないんだ。混合診療って言ってな、公的保険の適用を受ける保険診療と、これを受けることが出来ない自由診療を併用して受け

るとな、原則として保険の適用がなくなつて全額負担になるという不利益を受けるんだ。先進医療については一部例外的に認めているんだが、原則は変わらねえ」

「と、すると、また高齢者に不利益？」と幸田は眉根を寄せた。正直なところ少し頭が混乱している。富裕でない高齢者は保険診療だけ受けていけばいいではないか。そう思ったのだ。

「いいか、金持ちは例外もへつたくれもない、立派な医者が出て先進医療の宝庫みたいな病院に行く。もちろん保険は受けられないが痛くもかゆくもない。そういう病院は給与も高く医療機器も先端を走っている。例のTTPで海外の病院も自由診療で国内に進出しているから、日本の腕のいい医者は当然そつちへ流れる。これを防ぐには日本の病院も医療費を上げて医師の待遇を上げていかなければならない。政治もこれに沿う。そうなるよな。かくしてだ、高齢者を筆頭に、貧しい人たちの医療費負担は上昇していく。しかも三割を超える自己負担率で。これで病院に行きまされるか、どうだい幸田。国民個人だけじゃないぜ。国の健康保険財政レベルでも高負担化するんだ。またまたかくしてだな、再び消費税の増税

に向かうと、こういうわけだ。今回また十三パーセントまで上げると息巻いてるぞ、国は」

そうなら今度は「汝国民病んだら死ぬ」だと幸田は思った。ここでもいわゆる国民とは「貧民」のことだ。なぜこうなって、なぜそれが許されるのか。

年金の支給開始年齢も、漸次七十歳に引き上げる動きだ。しかも支給額も手品のような計算式を使って引き下げられている。

板垣の口角泡を飛ばしての「講義」は、この後も一時間ほど続いた。それは、本題に入る前の情けない男とは似ても似つかない凛としたものだった。

幸田は真顔で集中して聞きながら、会社から与えられたミSSIONの難しさを噛みしめていた。

「ところで幸田、お前今日の報酬の内金みたいな感じでいくらか出せないか」

社内規則には無理だった。自分の財布の中から出すしかない。たしか二万円ならと、内ポケットの財布を右掌で触った。

「悪いな、領収書出すから」

「いいですよ、うちがちゃんと支払ってからで」と札を二枚、そつと手渡した。

「後輩にみつともないところ見せちゃったな」

「いえ、ほんとに参考になりました。さすが福祉課の人ですね。ありがとうございます」

「おう。あ、そうだ、これ、取材の参考になるかも」

「ごそごそといくつかのポケットの中を探して板垣は、くしゃくしゃになった新聞記事の切れ端を寄越した。

「じゃあな。がんばれよ、記事」

後姿を見ると、肩幅が学生時代に見たそれとは格段に違った。筋肉が無いに等しい。全国大会準決勝進出の実績が泣いている。

幸田は或る種哀しさの中で、板垣の背に頭を下げた。席に戻り残った酒を口に含んだとき、涙目になっている自分に気が付いた。

「情けねえとこ見せんよ、あんたほどの人がよー」

日本の四季が消え去ろうとしている。

難病の妻菜緒と二人して里山に入ってから早半年、脇坂智志はそんなふうに思うようになった。

今年は夏になってすぐ、橡(くぬぎ)の葉が枯れ始めた。たしかに気温は一時十度前後に下がったが、五日ほどで元に戻っている。汚く色を変じ、先端がカサカサになっても枝にしがみついていた葉が、一気に落ちだしたのが二日前。脇坂は、九月の風に乗り空中に乱舞する濃淡の茶色の中で、真つ青な空を見上げていた。

いつまで続くのか、死ぬに死ねない日々が。

身障者である妻を殺すのは簡単かもしれないが、その後で万一自分で自分を始末できなかつた時の惨めさが耐えられない。謝りたくても、そのときには妻は死んでいるのだ。心中とは「二人の心が中(あたる)」ことだ。それが無ければ自分はただの殺人者に墮する。

『菜緒はもうその気である』と脇坂は確信していた。死を恐れ躊躇(ためら)い続けていたのは、誰であろう自分だ

った。

『いや』と脇坂は首を振った。死の解釈に迷っていたのではない、根本は「生」の解釈だ。もうすでに現(いま)の暮らしは生きているとはいえない。死んだも同然だった。だとすれば自然な心に抗(あらが)ってまで、重ねて「死ぬ」必要があるのか。菜緒は難病の果てに、自分は飢餓や寒さの果てに、つまりそれぞれが、心を介在させずに消し去られるだろう。それでいいのではないか。たしかにそう思っていた。突然住むところを追われ、「山」に登ってくるまでの日々は。

——あの日、すべての口座から一円を残して全額金を下ろし、廃車寸前のマイクロバスを購入したまでがいいが、残った半分の金を大事に抱いてきたこと自体、気持ちが中途半端だった。

狂ったように道なき道を上り、溪流のほとりでもぬかるみに嵌まつて停車した車。バックもウターンもできなくなつた。

『菜緒、この車、いまの俺たちと同じだな』
歯を食いしばって上半身を何とか起こし、瞬きを一つ

して、哀しげにうなずいた菜緒。

脇坂はいえは、顔を大きく歪めて笑った。

来る途中で睡眠薬を買った。それしか確実に死ぬる方法が思い浮かばなかった。下半身不随の上、最近では右の手も不自由になった菜緒では、刃物で刺しあうこともできない。首吊りも絞殺も避けたかった。同時に死ぬなということとは菜穂を先に、ということになる。遣った自分が後を追えるという自信が無かった。いや、恐れていたのは本当にそのことなのか。むしろ地獄の介護から解き放たれ狂喜乱舞する自分の姿、ではないのか。

『同時に、でなきやだめだ』

それは脇坂の中で、確信に変わった。

薬瓶だけのために薬局がくれたポリ袋は小さかった。それでも薬を嚙下（えんげ）する二人分の水ぐらいは入りそうな気がした。

「菜緒、溪流の水、掬（すく）ってくるからな」と、バスのステップに乗って中を覗いた。

「うん」とうなずいた菜緒の目が光っていた。

「すぐだから、すぐその溪流だから」

「さとし、戻らなくてもいいのよ、わたしはこのままで。」

ね？」

胸が文字通りズキッと「音」を立てた。

「ばか、何言ってるんだ、ずっと一緒だって言ったろ！」
声の上擦（うわす）った。狼狽を隠せなかった。

「ありがと…でも、もう、いいの」

「とにかく心配ないから。待ってる」

駆け出した後で、激しく心悸が亢進した。駆け出したからではなかった。

『その手がある。その手があった。あったあ！』

裏切りの昂奮だった。駆けている方向が違う。川の反対だ。分っていた。知っている。本当の自分はこれなんだ。涙が出た。頬骨の上を伝って耳に達した。

どれくらい下り坂を走っただろう。急に体が前に吹き飛んだ。木の根に足先をひっかけたのだ。

顔面が地べたに擦れた。

しばらくの間脇坂は地面に俯（うつぶ）せになったまま、動けなかった。

「きったねえ男。逃げて良いわけねーだろ」

第一生き残って、無一文の六十五歳に、この先何があるというのか。

脇坂はそのそと起き上がって、引き返すしかなかった。

沢から車に戻ると菜緒が、今まで一度も見ることがない表情をした。哀しみや、寂しさとも違う、痛みに耐えているというような。

「うっかり転んじやつてな、様(さま)は無いわな」
胸のあたりをはたいて苦笑をしてみせた。

「楽になれる薬ちようだい。それ」

菜緒の左手が、力なく脇坂の上着のポケットを指さした。

「睡眠薬でしょ」

「あ、ああ。一緒にと思ってた」

「無理しちゃだめ、わたしが辛いから。だってこうなったの、全部わたしでしょ、原因。最期ぐらい気持ち悪にさせて、お願いだから。ありがと。年を取っていても女なのよ、それなのに恥部を晒して何年も夫に汚物を処理させるなんて。いっそ、痴呆で何もわからないわたしだったらよかったのに……ごめんね」

菜緒の目から涙が噴き出した。

「菜緒違っうって、逃げたんじやー」と、口が滑った。

「いいのよ、そうして欲しかったんだから。そのあとで、一人時間をかけて笑顔で逝けるし」

「やめてくれ。頼むから責めないでくれ。僕も生きてたつて、もう何にも無いんだ」

脇坂はそう言うのと、薬瓶を取り出し、せわしく錠剤を掌に載せた。

「あ、だめ!」

それでも脇坂は一気に口に運んだ。

意外なことに菜緒が微笑んだ。

『ためしたのか』

錠剤の残りを全部菜緒に手渡しながら脇坂は、冷えてくるものを感じた。

『いずれにせよ……これで終わる』

菜緒が薬を嚙下した。

「最期にお願い」

「なに」と言いながら脇坂は、死が案外身近なものであることを実感していた。

「眠り込む前に、おっぱい吸って」

「え?」

少し驚いたが、うなずいて菜緒の胸を開いた。

下半身は退化して細かったが、胸から肩にかけては高齢者とは思えないほどふっくらとしていた。

「うれしい」

乳房を脇坂の唇に預けながら菜緒は、左上半身を少し揺らした。

「これで心中って想って眠りにつけるわ」

「え、だって一緒だろ、はじめから…」

脇坂は寄り添っていた上体を少し離して言った。

「わたしの方がお菓多かった」

脇坂はビクツとはねた。

菜緒は口元で笑いながら、ゆっくりと目を閉じた。

穏やかな、きれいな顔だった。

幸田は、高速自動車道を西へと疾走しながら、脇坂智志が日日新聞に投稿した文章を反芻していた。枚数規程があつたのか、編集部の筆が入つたのかは不明だが、決して長くはない。

『私たち夫婦はやむなく大都会を離れ、近隣県とはいえ僻地に近い山中に居を移します。今回の借家契約更新時

に保証保険会社に不適合とされ追い出されたのです。妻は六十五で下半身不随になり、介護のため六十で私も会社を退きました。高額な介護施設は私たちには無理でした。病院も最後には難病として見放しました。自己負担四割の健康保険、受診料の値上がりも堪（こた）えませんでした。さらには治療効果の無い診療は保険対象外との裁定も受けています。医療費全額自己負担になってしまったのです。消費税の増額、年金の支給開始年齢が実質七十になったことも痛手でした。現在は妻が七十、私が六十五です。生憎妻には年金がありません。老老介護で且つ「老人破産」の典型になってしまいました。この五年間来る日も来る日も炊事洗濯、飲食と排泄の世話、絶望的に心が疲れました。たしか昔に習いました。憲法二十五条です。健康で文化的な最低限度の生活保障。これを頼りに福祉課へ行ったところ、三十五の息子に私たちを扶養する資産があると判定され申請は却下されました。国は私たち夫婦に死ねと言うのでしょうか』

先輩にレクチャーを受けた内容に、ほとんどそのまま当てはまる生の声だった。

この投稿者の氏名は実名だった。匿名原稿を採用しな

い新聞社だったのだ。

幸田は掲載新聞社に山田という学友が居た。詳細を聞いたところ、山田もある程度踏み込んだらしく、移ったと思しき場所が解かったという。記事は約六か月前の投稿だ。むろん新聞掲載日は正確に分かった。

「人間は死に場所に、一度も行ったことが無い場所や不快な記憶につながる場所は選ばない」とは、山田の意見だ。

幸田はいま、その里山を目指していた。一日や二日で見つかるとは思わない。しかし、この夫婦に迫りたいという気持ちは高まっていた。

『ありがとう先輩。絶対骨のある記事にしてみせます』移った、と言つても、無一文に近い状態で大都会を追い出されたのだ。地元の不動産屋を探し回っても無駄だと思つた。住民登録は調べた。旧住所のままで、転出手続きはしていなかった。

『べらぼうめえ、天国に転入届があつてたまるか』

幸田は時代劇の口調で自分を鼓舞した。村の農家や狩猟をやる人、入会（いりあい）の仲間たち。取材はそういった人たちに限る。近くに駐在所があればそこ

もだ。

正午頃に問題の村に着いた。標高二千八百から三千ぐらいまでの山々が威風堂々と立ち並んでいる。

「はーっ、これは凄いとこだ」

記事から半年、果たして二人は生きているのだろうか。幸田は、万一の場合、第一発見者として容疑者の仲間に入れられないように、まず直近の駐在所を訪ねることにした。

「ああ、最近だけどね、村の佐久爺ってあだ名の男がねえ、支流のかなり上がった場所に小型のバスが居て、なんでもひげ面の男が住んでるみたいだったって。キャンプにしちゃあ様子が変で、ブルーシートで屋根こささえて土の竈（かまど）みたいなものも造つてあつたって話だ。登つてつた目的の栗茸（クリタケ）採りはまだちつと早かつたな、佐久爺も」

年配の小柄な警官は、噂話を楽しむ風情で話してくれた。

「二人ですか？ 男だけ…」

「ああ、佐久爺の話ではな」

別人かもしれない。いや無理心中の失敗か。幸田は小

さく首を振って、推測したがる自分を諫（いさ）めた。
「失礼ですが、村に不審者が入ったとかで、調べに行ったりはしないんですか」

「ああ、事件でもなければ、自分も一人勤務だし、第一この」と、壁に貼り付けた地図を指で突き、「佐久爺が言った場所へ登っていく途中、右左と見て行きや分かるべえ、よそ者のバラック建てでいっばいだあ。調べきれもんじゃないねえってこと」と言つて、首を小さく振つた。
大都會で名前だけを頼りに人を捜すのは不可能だが、寒村では別らしい。これも現地に来なければわからないことだが。

ガソリンを補給してから幸田は、非舗装の登山道に入った。左側が問題の支流で、警官がくれた地図の中の黒丸は、かなり上流になる。

警官の言つたとおりだった。

道路沿いの比較的太い木々の間に見え隠れするのは、大小の粗末な「家」だった。錆びたトタンの屋根、篠竹を大量に伐つて困つたらしい外壁、等しく窓というものが無い。さらには工事用のブルーシートの連続。積み上げられた薪の山。動いている人間の衣服は、男女とも例

外なくボロボロだ。

「これって、ほんとに日本かよ」

東京五輪からまだ五年しか経っていない。

幸田は右手をハンドルから離し、頭を掻きむしつた。居酒屋での講義で板垣は言っていた。

「幸田、日本は製造国家から投資国家に変貌したんだ。汗水たらして働くものが貧困の海に叩き込まれ、電子的なマネーゲームの得意な奴が富裕化する。貧富の差は拡大し、国民の大部分を占める貧困層が虚脱感に襲われることになった。十年前頃までの、技術大国日本を支えていたのはいわゆる高齢者だった。国はその高齢者をゴミのように扱ってしまった。一連の高齢者対策法制はな、二人程度で一人の高齢者を支えることはできないという政治的プロパガンダで、生産年齢人口を構成する選挙民の支持を得たうえで強行採決されたんだ。みていろ、いまに全国に姥捨山ができる。形としての山じゃない。法令と人の心で作り上げた老人廃棄のための山がな。だから大都會にもあちこちに聳（そび）え立つ。国の生産性に見合った人口、これが為政者の理論武装なんだ。だから切るのは非生産人口の構成員、つまり実質は高齢

者！ 少子化対策も単なる人口増加じゃなくて生産年齢人口の増加が目的だところなる。老後の蓄えを怠ったのは自己責任という論理もこれを支えている。分ったかい幸田」

十分ほど走ると道は、急に狭くなり小岩がゴロゴロしているような坂になった。篠竹が車の前面を叩き続ける。「傷つくな。ま、いいか、会社の車だし」

幸田の頬が不思議に緩んだ。加納部長の顔を拳骨でゴシゴシ擦（こす）っていたぶっている快感だ。

「何やってんだ一体。何が調査だバカヤロ」

少しでも広い所へ出たらそこへ車を停めて、徒歩で先へ進むと決めた。突き進んで戻れなくなると困るからだ。しかし、そうしたらしただで不安がある。野猿はまだいいが、徒歩の最中に熊や猪と突然遭遇したら終わりだ。防衛の音を出せるものといえは、自分の声帯しかない。幸田はようやくやく気持ちが落ち着かなくなってきた。

「脇坂さん、ですよね」

やや上擦った男の声に、マイクロバスに凭（もた）れて俯（うつむ）いていた脇坂はゆっくりりと、声がした方

を向いた。

「誰？」

「怪しい者じゃありません、僕はこういう——」
「二人か、他にもいるのか」

幸田は、名刺を出し笑顔で近づいているのに、警戒を以て左右を気にしている脇坂に、何か危険なものを感じた。

ボサボサの髪に痩せこけた頬、目だけが異様にギラギラとしている。名刺を受け取った際に見せた指の爪は、泥が詰まっついていて真っ黒だった。

「で、何でこんなところまで。いや、何で僕の名前を知ってる。じゃなくて、ここがどうして分った」

言葉が不自然に跳ねる。長い間人と会話をしていなかった証拠だ。

「そ、そこ、座っていいですか」と幸田は、丸太を蔓で縛って造ったベンチを指さした」

脇坂は硬い表情のまま、小さくうなずいた。

幸田は迷っていた。「ぐずぐず外堀、内堀と埋めていくなんて馬鹿なことだ。一気に、最初から本丸を突け。相手を激しく揺さぶる言葉から取材に入れ」と加納部長が

常々言っていたが、さすがにこの場所、この場合では腰が引けるのだった。

「一緒に来た、奥さんは？」

『しまった、急所を握り過ぎた』と、すぐに後悔をした。

車の中にも人影は無い。床に寝ているのかもしれないが、気になったのは、どこか沢でも洗ってきたのだろうか、茶碗と皿と箸が一人分だけ、粗末な台に載っていたことだ。

「さっき訊いたぞ。質問に答える。目的は何だ、なぜ菜緒のことまで知ってる」

「なおさんと言うんですか、奥さん」

「ああ。なんだ、そこまでは知らないのか」

「高齢者問題を、特集で。いろいろ企画があつて、その中の一つで」

「老人破産の自殺者を追つてか、記事は」

「ま、その、それに近い……」

「読んだことあるよ、おたくの雑誌」

「ありがとうございます」

「記事書いた奴をぶつ殺したくなつた」と脇坂は笑つて、「自宅で介護する爺と介護される婆の様子をエロ小説

もどきに脚色しやがつた。こんなに貧しくても高齢でも、性欲はあるんですねって、からかつてな」

幸田は誰の記事かはすぐに分つた。新卒の頭でつちな男だ。その記事を大笑いして採用したのが加納部長だった。『どっちも下種（げす）だ』と幸田は思つた。

「悪かった、きれいごと言っちゃつたな、自分だって五十歩百歩だ、対して変わらねえや」

脇坂が手の甲で鼻を擦つた。

二人で睡眠薬を飲んだあとで、最期の頼みを聞いて脇坂は、七十になる菜緒の乳房を吸つた。

静かに目を閉じた老いた妻の顔を、どれほどの時間見詰めていたろうか。脇坂もようやく睡眠薬に襲われて意識を失つた。唞が閉じる音が聞こえた、そんな気がする。

脇坂は目が覚めたとき、すぐ罪の意識に囚われた。

——わたしの方がお菓多かつた。

狼狽（うろた）えた。睡眠薬の量の差は故意ではなかつた。菜緒に言われて初めて知つた。生きてしまつたのだから、自分だけが、無理心中は「心中」ではない。単なる殺人だ。たとえ心が中（あた）つていたとしても

結果が全てなのだ。『どうする』、脇坂はハツとして菜緒の開いている胸に頬を寄せ、耳をつけた。

『動いてる』

菜緒の心臓も生きていた。二人とも睡眠薬の量が少なすぎたらしい。

脇坂の右の目尻がひくひくと痙攣（けいれん）した。寸刻前の慌てようはどこへやら、このことがどういふことなのかを、荒い呼吸の中で反芻をした。

菜緒の着衣の裾をまくり、昏（くら）い中を見た。微（かす）かな悪臭が流れてきた。下着は着けていない。オムツは途中のサーブエリアで外して捨てた。そこからこの山中までのルートに介護用のオムツを売るストアは何軒かあった。たとえ僅かな期間でも夫婦一緒に生きる気があれば、立ち寄って確実に買っていたはずだ。おそらく菜緒は、その時点で、早々に来る死を確信したに違いない。夫の手に掛かるか、心中かの違いはあっても。

穏やかな寝顔だった。死んだと信じている顔だと、脇坂は思った。

『何年も続いた糞尿の処理がまた迫ってくる』

脇坂は狂ったように首を横に振った。耳の奥で、小さな鐘の音が響いた。

菜緒の腹部を跨ぎ、跪（ひざまず）いて両の掌を皺じりの白い首にかけた。自分の鼓動が耳からも聞えてきた。

一気に体重をかけて絞めた瞬間、菜緒の目がクワツと開いた。

目を逸らし何度も叫んだ、「ごめん、ごめん」と。なお一層圧を強めながら。

文字通り時間が止まった。

目の前に薄赤くむくんだ菜緒の顔があった。

涙が堰を切ったように流れ出した。

新たな糞尿の臭気が鼻腔に達した時、脇坂は『終わった』と心を落とした。

幸田は身じろぎもせず、脇坂の話の聞いていた。

脇坂はと言えば、いつの間にか地べたに尻を落とし、体操を見学する生徒のように膝を抱いていた。

「もしかしたら洗ってあげたんですか、奥さんの遺体」
幸田はなぜか、そんな気がした。

「ああ、重かったけど背負って、この先の川まで行つて、溪流で。クソもオシッコも服の汚れもな。綺麗な水で流せなかったのは妻殺しの、罪だけだよ」

「それで奥さん、そのまま河原に？」

「まさか、あんたが座ってるベンチの後ろだよ、ちゃんと土の中」

幸田は跳ね上がるようにして立ち、すでに雑草まで住む背後の地面を見た。

「幸田さん、警察に通報していいよ。ここ下つたらすぐいや、必ずしてほしい、頼みます。情けないけど、自分じゃ、やっぱり死にきれないんだ」

それにしても半年もの間、電気の灯りもない場所です。自分が手に掛けた遺体と一緒に居る。人間なら普通、できはしないだろう。人間でないなら、彼は何。

幸田は、骸骨と見紛（みまご）う瘦身の脇坂を見詰めながら、そう思った。

幸田はレースのカーテンを引いて、窓ガラス越しに大都会の夜景をぼんやりと見ていた。加納の「指令」があつてからの一週間は、一体何だったのだろう。見てはいけないものを見、聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がする。

脇坂智志を殺人容疑で告発することは、未だにしない。このことも悩ましいことの一つだった。

『彼の妻殺しは、単純に「殺人罪」として括つていいの
だろうか。』

幸田はまた、法学部出の板垣の講義を思い起こした。殺された者の依頼で殺した場合が嘱託殺人、殺人者の行為があり被害者がこれを承諾していた場合は承諾殺人だが、これは犯罪の構成要件の問題で、幸田の場合も菜緒の嘱託や承諾の事実を証明できれば罪も軽くなるだろう。これなら幸田でもそうだろうと理解できる。しかしここで拘（こだわ）つたのが「死人に口なし」ということだった。つまり立証自体が難しいのだ。現場が加害者と被害者の二人だけだった、という場合が顕著だ。たとえそれ自体は立証できなくとも、客観的事情が事情

であれば違法としない。そうあってしかるべきではないかと、幸田は思う。

居酒屋では抽象論としてこれと同じ趣旨の質問をしたのだが、板垣は、これを逆さにひっくり返して戻してきた。

「違法性阻却事由として何かを明文化して、財政負担の元凶である高齢者を死なせ、減らそうとしたらどうだ。幸田は諸手を挙げて賛成するか」

「ちよつと話が読めない」

「うん。例えばオイタナジー、つまり安楽死だ。これが成立する要件は厳格にしたとしても、正当防衛や緊急避難のように刑法で違法性阻却事由にすれば、身体的苦痛によって死を選びたい人を救うことが出来るというわけだ。表向きのきれいなことの方で言えはな。実際は高齢者が犠牲になるだろう。医者と患者の近親者が結託すれば案外容易になる。成立要件としてはいまのところ名古屋高等裁判所の判例が参考になる。もう一つは尊厳死というものを阻却事由に加える案だ。世界的なブームみたいなもので、いま真剣に検討されている。たとえばいわ

ゆる植物人間になった患者。延命装置を外せば歴とした殺人になる、現在ほど。法定要件を満たせばこれを合法とする企てだ。安楽死と似た様な感じだが、患者本人の意思が必ずしも重要でない点が、高齢者対策法制的には美味しいんだ。詳しくは、後で資料送ってやるから自分で調べろ」

里山から戻ってきたら、コーポラスのポストに入りきらないほど分厚い茶封筒が、共同ポストの上に載っていた。板垣は口だけの男ではなかった。約束は守る。

幸田は居酒屋で一人になった後、板垣を罵ったことを、少しだけ悔いた。

加納部長には自宅での原稿執筆に一日欲しいと連絡をとり、腹こしらえから始めた。

午後五時半、テレビをつけ、コンビニ弁当をポリ袋から出した。電子レンジで温めにかかったとき、メイキンキヤスターの声に、体が硬直した。

「発見された遺体は都の特別区の福祉課の職員で板垣徹さん、三十五歳。現場は繁華街の路地で行き止まりになっており、暴行に因る内臓破裂が直接の死因と診られ

ています」

『先輩？…何でまた』と幸田は画面にかじりついた。

「体中に無数の暴行された痕があることから集団暴行に遭ったと思われます。警視庁は死体遺棄の疑いで本格的な捜査を始めています。次に政府与党は今国会の」

電源スイッチを切った。

「何が死体遺棄で捜査だ、殺人と解かっている。万が一に備えての官僚の保身じゃないか」

板垣がまた深酒をしていたに違いない。破裂した内臓はたぶん肝臓だと幸田は思った。危ない金融に手を出したに違いないとも。

「バカだよ、先輩。風俗通いで人生観の何が変わるんだよ」

レンジに入れた弁当のことなど忘れて幸田は、板垣から来た大型封筒を引き寄せ、丁寧に開封をした。

『これ、先輩の遺品の一つだな、今じゃ』

厚さ二センチはある膨大な紙の資料だった。

持ち上げたときに横に横にずり落ちた真っ白な封筒。

『まさか』

遺書かと、心急いだ。自殺ではない、報道に依れば他

殺だ。犯人の手がかりがここに？

「幸田、先日はありがとう。酒に金。みじめなところ見せちゃったな。」

じつは俺、暴力団に追われている。風俗通いで首が回らなくなつてな、悪徳金融に通う羽目になった。精確にはわからないが、もう二百万はくだらないと思う。当然返せない。もしかしたら制裁が来る。いや、確実にかな。彼らは賢い。昔の粗暴な連中とは格段に違うんだ。俺、

組員の生活保護審査に利用された。それをまた、何回もやってしまった。最低な人生になった。仕事の中身も腐っていた。本当に保護が必要な人たちに何もできない日々。却下した人たちの何人かは自殺した。何のために法律を学んだのか。誰のために福祉に携わっているのか。頭、狂っちゃつてな。そういうった生きがいの喪失感が酒と女に向かわせた。だめな男よ、弁解はしない。全て自業自得なんだから。

幸田。お前は真っ直ぐ生きろよな。いい奴なんだから。ミニコミ紙にだって力はある。せつかく企画の主任になったんだからクビを賭けて頑張れ。ポツにされたら他の手段を捜すんだ。それがお前の義務だ。

頼みがある。俺が万一のときは、後ろに書いてある住所の板垣美佐に、同封してある生命保険証書を届けてくれ。戸籍上はまだ妻だ。家庭内暴力でひどい仕打ちをした。保険金受取人になつてゐる。もちろん本人は知らない。娘と一緒に居る。けっこう可愛い。こんど小学生になる。子供のために籍を抜かずに未だに迷つてゐる女だ。せめてまとまった金、遺せたらいいなつて思つてな。心配するな、保険料だけは滞納してないよ。じゃあ頼むな。ブル」

ブルは柔道部で付けた綽名(あだな)だ。幸田は目頭が熱くなつた。水つ涙も垂れている。

「バカだよ先輩、ホントにバカ。謝つて戻つてくるの奥さん、待つてたんじゃないのかよ」

板垣美佐が住む家は下町の川沿いにあつた。築数十年と思われる二階建てのアパートで、二階に上がる外階段の手すりはかなり腐食してゐた。いや、階段そのものがステップを踏むたびに大きく弾んだ。

幸田は二〇七の番号を見つけると大きくノックをした。表札が出ていないのが少し不安だつた。もし引越し

ていたら、保険証書をどうしたらいいのかと。午前十時。働きに出ている可能性もある。

「どなた、ですか」

「幸田賢次と申します。失礼ですが板垣美佐さんと弥生さんのお住まいでしょうか」

子供の名前を付けくわえたのは、良く知つた者であることを伝える必要があつたからだ。こちらもフルネームにした。

カチャつと音がしてドアが二十センチほど開いた。女子供の家だ、鎖錠は常識だろう。

「あの、何か？」

いきなり板垣の名を口にしたら、即座に閉められるような気がした。

「生命保険証書を頼まれてお届けに上がりました」

「わたし、入つておりませんが。間違ひ」

「いえ、大学時代の先輩で板垣徹さんのです」

「そんな人知りません。失礼します」とドアがゆつくりと引かれた。

「困るんです！ 彼死んだので」

「本当ですか、それ」

細くなったドアの隙間から、煮物の香りが流れてきた。「昨日のテレビでも報道されてました。殺されたんです。警察が捜査中です。ぼくは彼が死ぬ前に郵送してきた手紙と書類で奥さんのこと、初めて知りました。信じてください、頼まれたんです」

「わたし、その人の奥さんじゃありませんが、どうぞ。ご近所に筒抜けになりますから」

幸田は何とか中に入れてもらえた。

美佐は弱火にしていたガスコンロを止めて丸いお膳の前に正座した。自分の座布団を幸田が座る方へ移すことも忘れていない。

「弥生ちゃんは」と小さな座布団を見ながら言うと、短く「保育園です」と応える。

「失礼ですが確認するために中も拝見しました。死亡保険金は二千万円です。まずこの証書を受け取ってください。遺体はまだ司法解剖中で警察です。保険のお手続きはそこに記されている代理店に電話をしてください。僕は単なる配達人として伺いました。先輩のご家庭の事情など全く知りません。よろしくお願ひします」

何か変だなと思いつつも、正座をして頭を下げた。

「知っていたら教えてください。この保険金を受け取ってしまつてその人が負つてたかもしれない債務も相続することになるんですか」

小さな声だったが、質問の意味は大きい。

「浅い知識ですが、生命保険金は基本的に相続財産ではありませんで、別扱いです。法定単純承認にはならないと思います。平気です。できればその代理店に聞いてください、間違いないと思います」

これは以前仕事で確かめたことがある。

それにしても、幸田は答えながら別の想いに囚われていた。

『元からなのかもしれないが、夫が死んだというのに冷静すぎる』と。なぜか寂しかった。人の心というものが哀しかった。それだけ生前の板垣が家族にした仕打ちが酷かったということかもしれないのだが。

「とにかく預からせていただきます。受取人はわたし名義ですが、弥生のために遺されたと解釈します。それでは」

「はい」

「お引き取りください」

幸田は一瞬口を開けて止まり、ゆっくりと唇を閉じた。ついでに歯で噛んでもみた。どんな事情があつたにせよ、それは夫婦の間のことだ。この対応はないだろうと腹が立つた。この住まいを探すにしてもどれだけ時間を潰したことがか。

扉を開けて辞去の挨拶をしようとしたときだ。幸田は部屋の奥に救いを見た。美佐が声を殺し、体を震わせて泣いていたのだ。「だから早くお引き取りを、だったのだ。きつ」と、そう思つたのだ。

板垣美佐を訪れた翌日、加納部長には黙つて幸田は、自分の想いを満足させるための行動に出た。脇坂の居る里山に再び向かつたのだ。もちろん会社の車で。前回の脇坂の言動の解釈で、何か見落としていたのではないかと、自分が不安になつていた。

今度は山歩きできそうな「いでたち」にしている。熊よけに携帯用のCDカセットも持った。突然遭遇しなければ安全なのだ。前よりもずっと下の方で駐車したかつた。Uターンは想像以上にきつかつたのだ。

若干空模様が気になる午後だった。暗いのは不気味だ

し、雨はすこぶる困る。ではなぜ脇坂に会いたいのか。

——幸田さん、あなたには想像がつかますか。年をとつても男は男だ。昔、菜緒が三十代後半の女ざかりの頃に出遭つて年上なのに惚れて一緒になつたんです。新婚時代には撫でたり舐めたり吸つたりした辺りから出る汚物を黙々と始末する、その後で拭いて綺麗にしてオムツを履かせる。毎日毎日、体調が悪ければ日に二回も三回も。菜緒はそのたびに恥ずかしそうに、申し訳なきさうにして天井を見詰めて。終わつて顔を見ると、目じりから決まつて涙が流れ出す。年を取つていても菜緒は女なんです。夫にさらしているのは同じでもその意味は真逆です。生きるつて、どうしてこんなに辛いんですかね、哀しいんですかね。

『まづい』と幸田は険しい坂を駆け出した。

——だから僕は、菜緒から逃れるために、同時に菜緒を苦痛から救おうとして、首を絞めました。でも幸田さん、ふと気が付いたんです。自分から逃れられてはいないと。僕自身を自分一人で救おうとしたらどうしたらいいんだらうつて。

転がつている石に足を取られては転び、横たわる木の

根につまずいては手をつき、息も絶え絶えに駆けた。熊も猪も、何が出てきても関係ない。幸田は自分の未熟さに呆れていた。

『死ぬな、脇坂さん、ごめんさい、気づかなかった』
前方からカラスが鳴き騒ぐ音が聞こえてきた。

「見えた。居る。十羽はいる」

彼らの下に何があるかは自明だ。怖かった。確認したくなかった。

現場に着いた。肺と心臓が両方とも張り裂けそうだった。カラスが数羽、いつべんに雑木の高い枝へと飛び立った。空に居た奴らとは違う連中だ。

幸田は硬直した脚で小刻みに震え、言葉を失った。喉が哽（か）れ、奥で風のような音がした。

恐ろしさで歯が全く、合わなかった。

先日幸田が座ったベンチの上に、首を吊つてぶら下がっている脇坂の姿。真下の土の中には妻の菜緒が埋まっている。

衣服から露出している部分は全て食いちぎられ、顔は眼窩が露出していた。おそらく彼の身体からは全ての血が抜けているだろう。

幸田は膝から崩れ落ちた。

涙が一気に溢れ出た。

「そこまでするんですか、脇坂さん！　そこまでしなくちゃいけないんですかあ！」

：遠雷がそれに応じたような気がした。

幸田は珍しい上司の姿を目にしていた。指示通りに記事を書かなかったとして怒るわけでもなく、なぜ高齢者側に感情移入したと責めるわけでもない。静かに、まるで頷いているかのように首を小さく縦に上下させ、時折困惑するかのように天井を仰いでいる。

「幸田、お前の記事は熟読した、その上で確認するんだが、このままで記事が通ると思っているのか。それとも通らなくても鹹首（くび）を覚悟で押し通す気なのか。もちろんボツにされるのが解かかっていても」

加納編集長の眼が幸田の目を追って離さないうわべ鞘を捨て去った真剣を手になっている武士の顔だった。

応え如何では即刻解雇となるだろう。だが幸田は今、自分の耳目で確かめ我が身を経験したこと、その全てを自分の言葉で書き連ね、読む人それぞれの捉え方に真つ

直ぐなままで委ねることにした。自分ごときに読者の気持ちを一方向に引き寄せることなど出来はしない。いまそこにある問題が大きすぎる。そう思ったからだ。「おい、どうした。俺は答えを待ってるんだよ、俺にしては我慢強くな」

確かに昨日手渡した原稿は編集長のデスクの上にいる。常ならボツ原稿は書き手に向けて投げつけられている。もしかしたらという期待はあった。

「わがままですが、直す気はありません。記事原稿が私自身だと思つて提出しました。駄目なときは私にできる責任を取る覚悟です」

言葉だけではなく幸田は辞表を懐に入れてきた。そこまで考えたのは先輩板垣の惨死と凄絶な心中をした脇坂夫婦が教えてくれた実社会とそこに生きる人間との避けられない暗闘に対する自分なりの解析の故だった。「分かった、もう行つていい。その前に一つだけ聞く。この記事で読者が飛びつくと考えた理由はなんだ。これは売れるかどうかという仕事の話だ。お前に任せるときに言つたよな。さあ、言い分があるなら聞かせてくれ」

幸田は自分の記事を読んだ後の読者の反応の仕方は

大きく二つに分かれると踏んだ。特に脇坂夫婦の件で若年層、壮年層は自己責任論をもつて非難をするだろう。全てとは思わないが、大勢を占めるはずだ。老後の準備を怠つたために経済的に追い詰められた人間を救うために、我々の負担をもつてするなという論理だ。一方、現在老後の中に居る人間の発想は違はずだ。戦後、国土の荒廃からの早期復旧、そして高度成長へ、さらには米国までも脅かす経済成長を成し遂げ、その後紆余曲折はあったものの、現在の先進レベルの日本の礎をつくつたのは誰であろう我々だ。それなのに不要なポロ雑巾のように扱うのは許せないというものだ。こうして事実に沿つて描いた記事は、その両者に「寄り添う」可能性があるのだ。幸田は書いた記事に自信をもつてそう語つた。聞き終わると加納は薄つすらと笑みを浮かべて言つた。

「なるほど、結果は明日伝える。ゴッソリだった、それだけには言つておく」

「自宅待機、でしょうか？」

「ああ、連絡は俺がする。ちなみに、今お前の懐にあるだろう辞表は受け取らない。会社都合の解雇にしないと

お前が雇用保険で不利な扱いを受けるからな」

幸田は会釈をしてから静かに応接室のドアを閉めた。「応接室とは意味不明だな」とため息が出る。廊下がいつになく長いような気がした。

会社から戻ると郵便受けに先輩板垣徹の妻美佐からの手紙があった。

部屋着になつて寛ぐ前に机に坐り、スーツ姿のまま手紙の封を切った。そうすべきだと思つてのことだった。『ぶしつけにお便りをしてすみません。住所は板垣の住所録で見つけました。先日は板垣の身勝手な願いを心温かく受けてくださり、拙宅を尋ね歩いていただいたのご厚意、心よりお礼を申し上げますとともに、当日のわたくしの人としてあるまじき失礼を深くお詫びいたします。夫の死を悲しむどころか、知ると同時に生れた安堵感を隠しめせずに醜いところをお見せしてしまいました。さらに、あなた様に見せるべき顔も分からず混乱した後、夫の死を悼むというより何か人の世を憐むような複雑な感情につつまれ、取り乱しそうになりました、あのうことか用が済んだら早く帰れと言わんばかりの態

度をとつてしまいました。あれ以来ずっと、自分がいかには浅はかで惨めな姿を見せてしまったかと恥じ入り、お詫びをと心痛めて参りました。どうかお許しくださいますよう伏してお願いをいたします。

お陰様で死亡保険金も出ることになり、最も心配していた娘の先々の進学その他将来も明るくなりました。夫が福祉に関する公務員としての矛盾に苦しんで心を病み自暴自棄から自分を壊した結果が惨死、ところが、その彼が公務員だったお陰で手厚い諸々の手当を受けることになるという世の中の不思議さに戸惑いさえ覚えます。娘とともに夫に対する蔑みや憎しみを捨て、ようやく彼の生家近くの寺に小さな墓を設けることも決めました。

こんな近況などあなた様にはご迷惑かとも思いましたがお礼の一部になるかもしれないと筆を執りました。幸田様、ほんとうにありがとうございます。

かしこ

「俺の失職には手痛い諸々の処分があるだけだな」幸田はそう自嘲すると、着替えるのも忘れ冷蔵庫を開けて缶ビールを取り、ベッドに腰掛けて一気飲みをした。

「親子の情が何より上か…なるほど」

スマホを手にするのと、なぜか目に涙が溢れた。

「あ。姉貴？ 賢次だけど、おふくろに伝言頼む。この間聞いた果樹園と野菜畑の売却な、ああ、知ってるよね？ とにかく伝えて、売るな、俺が跡を継ぐからって。詳しくは二三日うちにそっち行くからそのときに話す、うん、じゃあね」

幸田は電話を切って立ち上がったときに、自分が着替え前だとあらためて気づいた。「背広が誘ってるな、飲むなら外で」と。そうしようと苦笑いをした。

早速部屋を出ようとドアノブを掴み、ふと振り返り部屋の中を見渡した。

「独りってこういうときは確かに寂しい」

そう言った後で、自然な形で意を決した。

「結果を待つまでも無い、あした田舎に行く」

ドアを開ける気が少しく軽くなった。